伝えたい増やしたい建設業界の魅力

株式会社 本間組　滝沢　那月

私は昨年建設業界に飛び込んだ。大学では海洋生物の研究をしており、屋外で試料採集をする機会も多かった。そんな大学生活を通して体を動かすことの面白さと実物に触れることで学べることがあると知った。そのため就職活動においても実物に接して働く仕事を探し、その中でスケールの大きい物造りに直接関われる施工管理の仕事を選んだ。最初に配属された現場は海面からの高さが2m程度の防波堤上にコンクリートを打ち足し、4mほど高くする嵩上げ工事だった。海象条件が悪くなる秋までに施工を終わらせるため、土日に現場を稼働させることがあった。工事の完成検査が終わった後、所長から「この現場は夏場の外仕事で工程もタイト。滝沢がついて来られるか心配していた。一生懸命仕事をやり遂げて偉い」と言われた。私は早起きも暑さも大の苦手なうえに体力も無いので施工期間中は毎日クタクタに疲れていた。それでも別の現場に移りたいとか仕事に行きたくないとは思わなかった。なぜなら現場の厳しさを打ち消す魅力があったからだ。

私が大変な現場仕事を乗り越えられたのは、工事で得られた達成感のおかげだ。現場に配属された当初は上司の指示に従って型枠設置位置を決めるための墨出しをしていた。当時は何もかもが初めてで、与えられた仕事をこなすことで精いっぱいだった。そんな時に私が打った墨の上にピタリと組み立てられる型枠を見て、自分の仕事の出来が他の人の仕事に大きく関わることを実感した。それからはどんな作業も正確にこなして次の人につなげなくてはならないという責任を持って業務に打ち込むようになった。最初のうちは防波堤の出来を左右する重要な作業を担当することに不安を感じたが、上司とダブルチェックを行い、間違いがないことを確認しながら行った。施工が進み、一つまた一つとコンクリートが正確に打ちあがるたびに少しずつ不安が消えて自信がついていった。4か月に渡る打設作業を終えて完成した白いコンクリートの壁を見た時には自分が防波堤完成に欠かせない一つの仕事をやり遂げたことを実感し、大きな達成感を得た。

もう一つ建設業の魅力だと思う点がある。それは皆で協力して大きな構造物を造るところだ。約半年の嵩上げ工事の最中には機械が故障したり調整コンクリートが荒波を受けて破損したりというトラブルがいくつもあり、手戻りや作業の遅延が発生した。さらに、時化による順延が発生することを見越して海象条件の良い日があれば、現場を止めないようローテーションで休みを確保しながら土日も施工を進めた。休日の調整が難しく、スケジュールがタイトで大変な現場だったが、職人さんたちが協力してくれたおかげで海が荒れ始める秋までに施工を終わらせることができた。現場では、職人さんたちが後の作業の支障にならないように自分の作業を早く終わらせたり、資材運搬を手伝ったりと会社の垣根を超えて協力している姿が見られた。このように会社が違ってもお互いに協力しあうことで、工期内に品質の高い巨大な構造物を造り上げることができる。建設業独自の魅力の一つであると思う。

私たちが造る物は規模が大きく、造り直しが難しいので失敗はできない。非常にプレッシャーがかかるが、だからこそ大きな達成感を感じるのだろう。また困難な事態に陥った時は協力して乗り切る。「仕事で得られる達成感」と「現場での皆の協力」の二つが建設業の魅力であると考えている。友人に自分の仕事について話す時は、この二つが話題の中心となる。しかし、建設業の魅力や誇りはこれだけではないはずだ。ある上司は勤め始めた頃と比べて労働時間が短くなったと話していた。これは長年にわたって官民一体となって続けてきた労働環境改善の取り組みの成果ではないだろうか。また、建設業界で起きる労働災害の数も年々減っている。世代を越えて安全意識の啓発活動や安全設備の導入を行った成果だろう。このように労働環境の危険を取り除くための行動を継続している点も建設業界の素晴らしいところであると思う。私も連綿と続く、労働環境改善の取り組みに寄与するべく、最大限努力する。後輩達には仕事の大変さを減らして建設業の魅力をたくさん見つけ、自身が感じた魅力を周りの人に発信してほしいと思う。

私は今年も現場で仕事をする。女性でも現場で仕事ができるという姿をみてもらい、これから建設業界に入ってくる後輩たちに建設業界の面白い話や魅力をたくさん伝えられるようになりたい。